



[招待作家]

- Francisco Laranjo (ポルト大学教授・ポルトガル) ●●
 鐘 孺乾 (中南民族大学美術学院教授・中国) ●●
 朴 南姫 (慶北大学校教授・韓国) ●●
- 姜 パレム (昌原大学校教授・韓国) ●●
 金 庚樹 (昌原大学校教授・韓国) ●●
 Ivonete Cavalcanteと子どもたち (サンパウロ市職員・ブラジル) ●●

[日本]

- | | | |
|------------------|-----------------|------------------------------------|
| 浅浦 恒敏 (長崎) ● | 高島 芳幸 (埼玉) ● | 村里 政則 (長崎) ●● |
| 新井 法子 (群馬) ●● | 高橋 俊明 (東京) ● | 村山 美菜子 (神奈川) ● |
| イケダ 一路志 (長崎) ●● | 武内 カズノリ (千葉) ●● | 森 貴也 (大分) ●● |
| 池田 陽一 (熊本) ● | 田中 睦治 (沖縄) ●● | 森永 昌樹 (佐賀) ●● |
| 井坂 健一郎 (東京) ● | 辻村 涼子 (熊本) ● | 諸岡 沙織 (福岡) ●●● |
| 伊藤 昭博 (大分) ● | 津野 元子 (千葉) ● | 山口 吟子 (長崎) ●● |
| 入江 一樹 (長崎) ● | 坪田 政雄 (茨城) ● | 山村 知宏 (沖縄) ● |
| ウエダ 清人 (長崎) ●● | 徳永 玲子 (長崎) ● | 山村 みぎ (沖縄) ● |
| 薄井 崇友 (東京) ●● | 富松 楓子 (熊本) ● | 山本 伸樹 (福島) ●●● |
| 宇野 和幸 (東京) ● | 内藤 修子 (長崎) ●● | 吉岡 宣孝 (長崎) ●● |
| 榎 和子 (長崎) ●● | 永田 典子 (東京) ● | 吉岡 まさみ (東京) ●● |
| 大木 道雄 (埼玉) ● | 中村 安次郎 (埼玉) ●● | 吉川 信雄 (神奈川) ●● |
| 大塩 博美 (神奈川) ●● | 西村 典子 (東京) ● | 吉田 形 勲 (長崎) ● |
| 尾形 勝義 (東京) ● | 野村 俊幸 (千葉) ● | 山口 恭弘 (長崎大学教授) ● |
| 小栗 栖まり子 (兵庫) ●●● | 馬場 史子 (長崎) ● | 熊本信愛女学院高等学校美術部 ● |
| 金子 衛 (長崎) ●● | 林 典子 (熊本) ● | 長崎市立東長崎中学校美術部 ● |
| 鹿山 悦子 (神奈川) ●● | 深江 嵯成枝 (長崎) ●● | 長崎大学教育学部附属特別支援学校 ● |
| 川田 泰子 (鹿児島) ● | 藤上 慶 (山口) ● | |
| 川野 裕一郎 (山口) ● | 古本 元治 (福岡) ●● | [メッセージアート] |
| 岸川 優子 (長崎) ●● | 前田 信明 (熊本) ●● | 草野 十四朗 (活水高校教諭) ● |
| 木嶋 正吾 (東京) ● | 増田 和剛 (高知) ●● | 小畑 郁男 (作曲家 福岡女学院大学非常勤講師) ● |
| 釘宮 麻衣子 (大分) ● | 松尾 桂子 (長崎) ●● | 竹下 美美 (平和公園の被爆遺構を保存する会 共同代表) ● |
| 国松 実 (長崎) ●● | 松尾 美希 (東京) ●● | 早見 晃 (美術評論家) ● |
| 重野 裕美 (長崎) ●● | 松村 明 (福岡) ● | 松尾 龍伸 (長崎インターネットウェブマスター) ● |
| 重松 希 (福岡) ● | 丸山 常生 (東京) ●● | 宮田 徹也 (日本近代美術思想史研究) ● |
| 柴 清文 (奈良) ● | 三木 祥子 (東京) ● | 里 正善 (長崎を最後の被爆地とする誓いの火灯台火台建設委員会) ● |
| すやま ゆうか (東京) ●● | 溝上 強 (長崎) ●● | |
| 関 淳一 (東京) ● | 宮部 真知子 (長崎) ● | |
| 関 月子 (神奈川) ● | 武藤 三重子 (佐賀) ● | |

[韓国]

- | | | |
|----------------|--------------|--------------|
| 鄭 鍾孝 (昌原) ● | 李 永照 (ソウル) ● | [その他の協力者] |
| 許 ナレ (ソウル) ● | 南 孝眞 (昌原) ● | 浦川 垂津子 (清州) |
| 洪 東植 (釜山) ●● | 盧 淳天 (昌原) ●● | 音辻 尊徳 (長崎) |
| 井ノ上 理恵 (昌原) ●● | 朴 然淑 (大邱) ●● | 柏井 良友 (埼玉) |
| 田 秀敏 (昌原) ● | 申 政宰 (ソウル) ● | 金 福洙 (清州) |
| 朱 淵雅 (昌原) ● | 申 京愛 (大邱) ●● | 佐々木 久見子 (東京) |
| 姜 昌浩 (昌原) ● | 辛 美花 (昌原) ● | 降田 達季 (長崎) |
| 姜 善英 (昌原) ● | 呂 閔暎 (昌原) ● | 星野 勝成 (東京) |
| 川田 剛 (大邱) ●● | | |

[中国]

- | | | |
|--------------|-----------------|-------------|
| 金 池泳 (ソウル) ● | 烏 鳴雷 (内モンゴル) ●● | [実行委員] |
| 李 男美 (大邱) ●● | 烏 鳴鳴 (内モンゴル) ●● | 野坂 知布 (長崎) |
| 李 正喜 (昌原) ● | | 波多野 慎二 (長崎) |
| 李 星陸 (昌原) ● | | 前田 真希 (長崎) |
| 李 景照 (大邱) ● | | 廣岩 裕香 (長崎) |
| | | 中田 寛昭 (福岡) |
| | | 佐藤 千代子 (長崎) |
| | | 岩永 晃典 (長崎) |
| | | 井川 惺亮 (長崎) |

長崎ブリックホール ●● 活水高等学校・活水中学校 ●● 長崎歴史文化博物館 ●●
 長崎大学附属図書館ギャラリー ●●

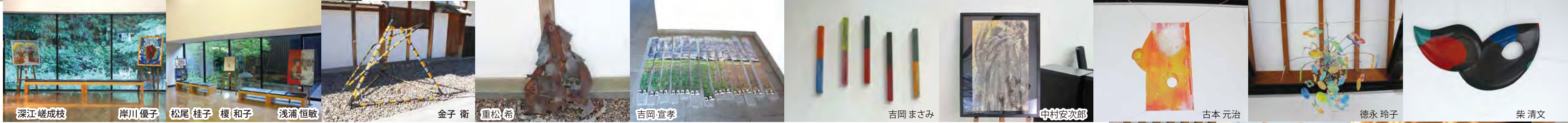
被爆70年を考える現代美術展 RING ART P&L 2015
 主催: RING ART 共催: 長崎大学
 協力: 長崎歴史文化博物館 / 学校法人 活水学院
 後援: 長崎県/長崎市/長崎県教育委員会/長崎市教育委員会/ポルトガル大使館
 在名古屋ブラジル総領事館/一般社団法人日本ポルトガル協会/長崎日本ポルトガル協会
 長崎新聞社/一般社団法人 共同通信社/NHK長崎放送局/NBC長崎放送/NCC長崎文化放送
 KTNテレビ長崎/NIB長崎国際テレビ/長崎ケーブルメディア/朝日新聞社/西日本新聞社
 毎日新聞社/読売新聞西部本社/エフエム長崎
 助成: (公財)十八銀行社会開発振興基金

被爆70年を考える現代美術展 RING ART P&L 2015 : 報告書
 編集・発行: RINGART 2015年12月 デザイン: 前田真希
 [ホームページ] <http://www.ringart.jp>

被爆70年を考える 現代美術展 RING ART P&L 2015

Contemporary art Nagasaki of Peace & Love
 会期: 2015年7月7日(火) - 8月30日(日)
 主催: RING ART 共催: 長崎大学





深江 嵯成枝

岸川 優子

松尾 桂子

櫻 和子

浅浦 恒敏

金子 衛

重松 希

吉岡 宣孝

吉岡 まさみ

中村 安次郎

古本 元治

徳永 玲子

柴 清文

長崎歴史文化博物館

〈会期〉8月1日(土)～16日(日) 8:30～19:00
 〈場所〉長崎歴史文化博物館 1Fエントランス・2F回廊

「被爆70年を考える現代美術展2015 長崎歴史文化博物館会場雑感」

利休鼠…この日本の伝統色の黒色を外壁に、屋根に、配し 本漆喰の白壁と花崗岩の割肌で石垣を連続させる…江戸期の長崎奉行所を忠実に復元しようとした建築家黒川紀章の渾身の意匠を平成期のコンテンポラリーアートの群が「平和と愛」のメッセージを携えて駆け抜けた。軽妙なフットワークでひらひらと、そしてカラフルに歴史の重厚感を溶解し利休鼠に同化してゆく。白壁の回廊に風を受けたTシャツが無い、茶室前の水琴窟の坪庭に主張を隠し、規則正しく敷き詰められた玉砂利に意味を見つけ出す。開館以来10年、この無機質な空間にこれほどの命を感じたことがあったのだろうか。2015年8月、現代美術を通して歴史を顧みるRING ARTの試みは長崎歴史文化博物館に深い印象を残して、そして終わった。建築家の意図する歴史性を帯びた時間軸の復元と「平和と愛」を意図する表現のコラボレーション。強い意志のぶつかりで生み出された相乗効果の圧縮された空気感。回廊を歩くたびに味わったわくわくする毎日は今はない。緊張のない連子格子の窓から眺める風景はトロリとした日常。平和も愛も意識を持たない。

「歴史と現代の共生」…建築家は開館記念講演で奉行所の書院風和風建築と現代のミュージアムとの融合を「共生」というキーワードで熱く語っている。博物館の二連切妻屋根はあえてボリュームを抑え奉行所の屋根のスケールに近づけたものだと。また二階アトリウムの木造骨組を露出させた室内空間は特に象徴的で、骨組みを構造物ではなく実物大の展示物として位置付けていた。黒面格子の壁も含めて。そうした純日本風の意識空間に展示したポルトガルのフランシスコ・ラランジョや韓国の姜パレムらの作品群は国際性という異なったベクトルで共生感を生み出していた。

一階エントランスの吹き抜けに吊るされた折り鶴ほど「平和と愛」の象徴にふさわしい造形物は見当たらない。ここでもピュアな子供たちが落とす色彩が床面、天井面の利休鼠と融合した。ワークショップによって増殖していく折り鶴はピークへの期待感を含んでまことに興味深い日々を作り出してくれた。一体一体が10メートル近いラインの末端を占める拘束感はその軽妙な浮遊感とともに、やがてラインは見えぬ 操り人形に命が入るがごとく鶴の群舞に昇華した。空に舞う凧をコントロールする凧糸の強靱で柔軟な性質は 微妙なテンションで鶴をも踊らせることを目の当たりにした。「平和と愛」のメッセージが届いた美の瞬間でもあった。

博物館で展開された16日間の入館者は41,000人。8月の長崎を訪れる世界からの訪問者、あらゆる年代に強いメッセージを残しただけでなく、日頃長崎の歴史文化を語る我々に開館10周年以前に60年の辛い歴史があったことを思い起こせる機会でもあった。

野間 誠二 (長崎歴史文化博物館)

「制作を見直す機会に感謝」

戦後生まれの私は、戦争の悲惨さや恐怖等の実情を知らない。平和教育の重要性を意識し、積極的に取り組んできたのだろうか、自信がない。平和活動に熱心な高校生や語り部などが活動する姿を目にするとき、頭が下がる。

被爆70周年を迎えるに当たり、今回の企画に参加できたことは、自己の表現活動を深めるよい機会となった。学校教育活動を通して、平和教育に関わってきたが、自己の内面と向き合い作品をつくるのが少なかったように思う。県内外や世界からの作家が参加したRING ART 2015は、作品内容だけでなく、人間同士の強い繋がりと平和への意識の高さを感じた。これまで狭い境遇と価値観の中で制作活動をしてきた私には、新しい作家及び作品との出会いが大きな刺激となった。

今回の企画の中に、貴重な講演が数多くあった。他の作品展と重なり、いくつかの講演しか拝聴できなかったことを悔やんでいる。その中で一人の作家の作品づくりの根幹に触れることは意義深い。その一端を感じ、自己の作品に対する思いを広げることができたことに感謝している。これまで多様な表現様式の作品に接してきたが、自己の感性を揺るがすものはそう多くはなかった。一人の表現者として、今、やれるべきことに情熱を注ぐ作家は魅力がある。本企画展がそうした作家との出会いの機会となり、嬉しく思う。

ウエダ 清人 (元長崎県造形教研究会会長)



〈趣旨〉

被爆70年となり、長崎も歴史も文化も博物館もじっとしておれません。長崎歴史文化博物館の会場では、展示会に先駆けて5ヶ月前から一般参加型の「折り鶴ワークショップ」を月に一回開催。博物館に来てオリジナルの折り鶴を作り、それを長崎や歴史や文化や博物館に飾って折念すれば、平和が見えてきます。本館エントランスの吹き抜けに床から二階天井まで、いっぱい飾れば、これらオブジェがきれいに光り輝くことでしょう。こうして折り鶴たちが美しく見えた時、永遠の平和を感じることでしょ。

長崎歴史文化博物館は、旧長崎奉行所立山役所跡に建つ博物館であると同時に、主に江戸時代の日本(長崎)と諸外国との海外交流史を紹介している博物館です。現代美術を通して長崎の地から国際交流を積み重ねてきたRING ARTにとって、まさにふさわしい場所と言えるのではないかと思います。

そしてこの夏、私達RING ARTが長崎の歴史を学ぶ場であるこの博物館で、未来を見つめて活動しながらも、過去の歴史をふまえつつ、今のアート(現代美術)を大胆に展開していくことは、つまり「過去」と「現在」を共存させつつ被爆100周年という平和な「未来」を見据えているということであり、それはきつと意義深い出来事になることでしょう。



伊藤昭博



田中睦治

高橋 俊明



高島 芳幸



山本 伸樹



①山口 吟子
②内藤 修子



①浦上 強
②丸山常生

ブリックホール会場出品者



井坂健一郎

入江一樹

川野裕一郎

関 淳一

武藤 三重子

野村俊幸

長崎には「文化的多様性の受容」とでもいうべき固有の磁場がある。それは、古の大陸や鎖国時代の諸外国との往来の窓口であり、宗教的寛容さと迫害の軌轍の狭間という地政的特性と、近代産業化の先端を担いながら皮肉にも被爆という惨禍をくぐり抜けざるを得なかった歴史的経緯が物語っている。ここの人々には、現代のグローバリズムの功罪と類似の状況を、他所よりも早く激しく受容せざるを得なかったのと引き換えに、多様で異質な感性を許容できるポテンシャルも醸成されてきたのではないかと感じた。

作品『遍在する場／偏在する場』は、その磁場から有形無形にインスピレーションを受けた。例えば、長崎歴史文化博物館の回廊スペースが、高い外壁による圧迫感とともに、壁間から小高い丘の家並みが見えるパースペクティブの開放感も感じられたのは、長崎の入り組んだ入江と丘が織りなす地勢を連想させたし、そこに撒かれた推計約300万個の砂利の数が、第二次世界大戦時の日本の戦没者とほぼ同数だったことは、今展のテーマと強く関わるようになった。そして、夏の太陽の強い陽射しが織りなす光と影、滝のように降り注ぐ土砂降りの雨、砂利の隙間からわずかに生えた草などからも、サイト・スペシフィックな作品に厚みが加えられた。ふだん人通りの少ない裏門周辺のスペースは、半ば偶然にも、日本の縁辺に位置した長崎の磁場と共振し、私のインスタレーションとパフォーマンスの場となった。

現代美術のエッセンスの一つに、「文化的多様性」をどこまで視覚的想像力を実験的に刺激しながら、今日の問題として対象化できるかが挙げられる。この美術展の意義が、長崎が宿した歴史的な記憶の継承と、そこから生まれる新たな想像力を、いかにアートによって展開できるかという点にあるとすれば、このポテンシャルをどう生かしながら独自のムーブメントとして展開していくか、その継続的努力と工夫が今後も試されているのだと思う。

丸山 常生 (東京・アーティスト)



パフォーマンス



「歴史と平和と現代アート ～長崎歴史文化博物館会場から～」

8月からさかのぼること半年前、長崎歴史文化博物館のロビーで、「おりづるワークショップ in れきぶん」を開始した。アートを通して今ある平和の大切さを子ども達に感じてもらうことが目的だった。初回の人数は20人ほどだったが、その後人が集まるようになり、半年後には、ひとつの大きな平和のアート作品を作り上げた。

さて、この「被爆70年を考える現代美術展」が、長崎歴史文化博物館で行われたことを、周囲はどのように受け止めただろう。美術作品が博物館にあることを不思議に思った方もいるかもしれない。現代アートは、馴染みのない人の中でよく「わけのわからないアート」と言われることがある。もしかしたら博物館側にも「一体何が始まるのか?」と思われたかもしれない。しかし、被爆70年という節目の年、今に生きる表現者たちが国を超えて集い、作品を通してメッセージを発することに、私たちは大きな意義を感じていた。長崎を中心に活動を続ける私たちは、ここがその昔、国際色豊かな街であったことや、原爆が投下されて大きく傷ついたことを知っている。この場所において、過去と現在を共存させつつ表現を展開することは、きっと未来を見据えることに繋がるのだ。それは江戸時代に存在した奉行所跡に建っているながら、長崎の歴史と文化を発信し続けている長崎歴史文化博物館でなければ成し得ないことであった。

「被爆70年を考える現代美術」が博物館とコラボレーションするためには、事前の交渉から準備に至るまで課題も多かった。私たちはこの企画の意義を理解してもらうために話し合いを進め、必ず実現させるという強い思いを示した。幸いにして、この企画に深い理解を示してくれた方がいたこと、さらに被爆70年という節目だったことも手伝い、この企画がスタートすることに決まった。館の様子を伺えば、ワークショップの回を重ねるごとに、職員の方々も興味を持ち、手伝ったり補助してくれたりした。こうして博物館の吹き抜け空間が増えてゆくごとに、色とりどりの美しい鶴たちが館内を充実させた。特にガラスの天井から光が降り注ぐ午前中は、神々しいまでに鶴が輝き、人々の足を幾度となく止めさせ、アートの力を見せつけていた。

その後、海外作家を含む47名の展覧会が始まった。作家たちの力作は、観る人に様々な感動を与えたようである。特に回廊は驚きの変貌を遂げた。いつも殺風景な通り道は、いきいきとした空間に生まれ変わり、通りすぎる人々を楽しませていた。

長崎歴史文化博物館会場は好評のうちに幕を閉じることができた。多くの来館者が口々に「すごきれい!」と展示風景を撮影した。また、普段見過ごされがちであった場所の持つ魅力を再発見することにもつながった。ありがたいことに館長からも、「このままずっと展示を続けて欲しい!」という言葉がいただくことができた。ワークショップから展覧会まで半年かけて行われたこの企画は、少しずつ周囲を巻き込みながら平和の美しさが形作られていき、多くの人々を笑顔にすることができたのである。これから30年後、日本は戦後100年を迎える。果たしてその時、戦争について伝え続けている人はどのくらいいるのだろうか。世の中が殺伐とし始めた時、表現者は苦境へ立たされる。しかし、芸術には人間が持つ暗い影の側面に対抗しうる力を持っている。皆がその力を育てなければならぬ。

最後になったが、この企画の実現に多大なご理解とご協力をいただいた、長崎歴史文化博物館の大堀館長をはじめ、野間統括マネージャー、そして職員の皆様は心より感謝を申し上げます。

前田真希 (長崎歴史文化博物館展示会場担当・会社員)



折り鶴
パフォーマンス

〈日時〉8月9日(日) 10:00～16:00
〈場所〉長崎を最後の被爆地とする
“誓いの火”灯火台

“誓いの火”灯火台の下、道行く人々と一緒に鶴を折り、灯火台に飾る「折り鶴パフォーマンス」で被爆70年の平和と美を表現しました。今夏は計608羽が飾られました。



〈折り鶴パフォーマンスの役割〉
“誓いの火”灯火台モニュメントは、被爆者渡辺千恵子氏の尽力によりギリシャ政府からオリンピックの聖火(=故事に「聖火が灯っている間は平和だ」)が83年長崎にもたされた。87年に「長崎を最後の被爆地とする“誓いの火”灯火台モニュメント」が「パンタクル」(星型五角形=完全なる象徴を平和に託して)の構造形態(PSコンクリート製に、外壁白タイル)に、台座(UFOの円盤形に水をイメージして呉須タイル)と、そして塔に内包する9色(=折り鶴、国旗の色など、また色の3原色から)で建立された。この塔上に灯される聖火は、その後公的機関等に分火され、マラソン大会にも活用されている。
更にRING ARTの取り組みは、毎8月9日、灯火台の下で往きかう世界の人々に「折り鶴パフォーマンス」(=折り紙を折る・飾る・鑑賞する)を灼熱の猛暑の中で「生きた平和教育、生涯教育、国際交流として」を命がけて呼びかけ実施したり、また福島原発トラブルにより、昨夏から「折り鶴ワークショップ」(アート)を通して福島と長崎を結び付けたりして「誓いの火」を守り続けている。
なお若い世代の支援として知的障害の生徒さんらが、このパフォーマンスを盛り上げ、その姿は明るい平和の兆しだ。



| 活水高等学校・活水中学校

〈会期〉8月7日(金)～16日(日) 9:00～18:00(最終日12:00まで)
 〈場所〉活水高等学校・活水中学校 一号館(被爆校舎跡地)

「被爆70年を考える現代美術展」に参加して

偶然にも展示会場の活水中・高校が、数年前に転居した娘夫婦の住居から徒歩で30分ほどの場所だったことに何か運命的なものを感じました。居候させてもらった娘夫婦の住居から会場まで、作品素材や道具をリュックで背負って運び、インスタレーション完成まで3日近くかかりました。炎天下での制作は過酷でしたが、原爆投下時の灼熱の瞬間を想起させることとなりました。当初、原寸大の原爆のフレームは立ててモニュメンタルな印象を狙っていましたが、構造的な強度への読みが甘く横たわった形態となりました。フレームの中を縦横無尽に走る私の心電図トレースは、一瞬にして14万もの命の鼓動を消し去った原爆への憎悪の表れでした。もしかしたら、核分裂の不気味なエネルギーをも感じさせたかも知れません。カオスから抜け出した私のある日の「生の記録は」現在の「生」の祈りの場と共鳴し、自由に空間を駆け巡ります。この場の空間だけでは収まりきれない有り余る「生」が大きなコミュニティーに埋没しますが、後にそこから抜け出て悠久へと旅立ちます。そんな、ドラマを思い描きながら現場制作していました。

「被爆70年を考える現代美術展」では、純粋に造形表現を追求している作家が多く、自由で多様な表現であふれる空間こそが平和を希求する強いメッセージであることに気づかされました。半月あまりの長崎滞在では多くの人や場所との出会いがありました。参加作家の方々と共有できた公開講座や対話は私にとってかけがえのない体験となりました。色々のご配慮いただいた井川さん・野坂さん・波多野さんはじめとする実行委員の方々、搬出や長崎案内をしていただいた金子さん、そして長期間の滞在を快く受け入れてくれた娘夫婦に深く感謝いたします。

それぞれの作家が自分の世界を追及されている「リングアート」の活動が継続され、社会に平和の波紋を放ち続けていくことを祈念しております。

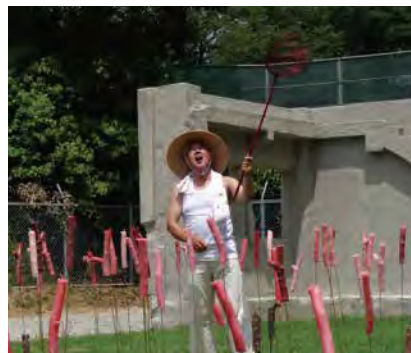
尾形 勝義 (東京・アーティスト)

私は、祭祀の担い手、或いはシャーマンとして自ら締め込み姿で演ずるパフォーマンスと忘却された桜の巨木+元軍人であった亡父の遺品を象った作品を融合させ空間全体を作品にする。

6月28日、白河のアウシュヴィッツ平和博物館から元イスラエル駐日大使エリ・コーヘン氏お手植えの桜。7月4日、活水高校から学び舎を見守る校庭の桜。これらの大切な桜の枝が託されて制作を開始した。

活水高校のパフォーマンスでは70年前この地に生きた少年を演じ、娘と妻と私で峠 三吉の原爆詩『8月6日』を群読し、地声を張り上げ『別れ』と『赤トンボ』を絶唱した。爆心地から500mにあった鎮西中学校の教員と生徒103名が犠牲になった遺構を残す活水高校の中庭に103個の穴を穿ち、地中深く支柱を突き刺し桜の枝を象った作品を渦巻状に並べると、私の魂は70年前の長崎と時空を超えて邂逅した。作品が灼熱の太陽に焦がされ想像力を超えた異形のものに変貌を遂げ、蠟燭作品を灯さなかったことで鎮魂してあげたという傲慢さに気づいた鎮魂の展示の幕は下りた。先ず作品を灯して祈り鎮魂することからナガサキピースミュージアムで来秋開く個展『大木道雄無限渦巻』の幕を開けたい。

大木 道雄 (埼玉・アーティスト)



パフォーマンス



- ①7 大木 道雄
- ①8 森 貴也
- ①9 津野元子

「被爆校舎跡地での野外展示～活水中学・活水高校会場」

○被爆50年と70年の継承：現代美術展と地域を結びつける活動は、今では当たり前のように行われている。しかし、50年に一度、また次に20年後に一度と期間を置いて行われている同一テーマの例は少ないと思う。先の展覧会、また今回の展覧会と意味が違うのか、同じなのか。また、参加する作家は、前回参加していただいた時と、その後の時間経過をどうとらえているのかなど、その姿勢を見ることができた。一人一人の作家の感想が、今回の展覧会の意味になると思う。是非その話を聞いてみたいと思う。

○被爆遺構を使った現代美術展の開催：被爆遺構は展示場に向かない。長崎ではあまり例がない。今回の現代美術展は、被爆校舎を持つ学校を使用したため、学校を管理する方々の美術展への懸念や心配を払拭するのに労をした。まず、野外を中心に考えた展示では、被爆校舎跡地(芝生広場)をどのように活用し、またその使用することの理解をどのように得るのかを考えた。しかし、夏の期間は大切な芝生の育成期間中のため、芝生の上に作品はおけないと説明された。また、夏休み期間中は、学校閉鎖なので校内へ入れない、作品の展示場所が確保できないという学校が側の話があった。展示に関する問題点をどう解決して、展示ができるようにするかが、私の課題であった。

○生徒が見る目：期間中は部活や課外授業で多くの生徒が横目で見ている。生徒は、8月9日は平和集会で全員参加の登校日である。芝生広場で集会が行われ、11時2分には黙祷をする。芝生広場の彫刻、設置作品を眺めながら、また、外からみることがきるガラス張りのカフェテリアの作品を見て、いつもと違う学校の雰囲気を楽しんでいた。そこには一つ一つの作品のメッセージを知ろうと私に質問をする生徒も多かったです。

○一瞬の美術館：2週間ほど展示を行い、外部からの観覧者は30名ほどであった。朝から夕方まで受付をして、私自身、いつもと違う時間の流れを知ることができ、また、全体の作品を管理することで、野外の美術館としてふさわしい作品レベルを維持することができた。野外展での運営側の管理として、猫の糞尿対策や、芝生の養生対策、さらに台風並みの大風が吹いたときには、作家と直接連絡して対応の指示を受けるなど、学芸員並みの作業があった。また、そんなハプニングも我々スタッフは楽しんだ。

○参加作家の意気込み：今回は遠く、関東からか参加して作家が多かったです。自家用車で長崎まで下見に来て、パフォーマンスや作品設置をしていただいたことに、作家としての姿勢を感じた。特に数日に渡り、泊まり込みで設営をし、その後の自作の管理まで行うなど、一流作家の責任感を感じた。やまもすれば、野外展では主催者任せの作家も多にいるが、そのような作家は一人もいなかった。

○参加作家への思い：この展覧会に参加していただいた作家の方々に、本当に感謝している。また、長崎という平和を象徴するこの町にも感謝である。売名行為ではない平和、通りすがりの活動ではない平和展、そんな思いを胸に、参加してくれた作家との心のつながりを感じた。私たちは手弁当で、参加していただいた作家の気持ちに応えようと頑張るのみであった。波多野慎二 (活水高等学校・活水中学校展示会場担当・高校教諭)

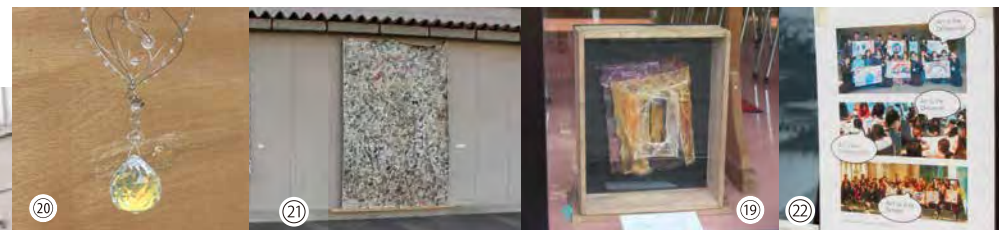


〈趣旨〉

1945年8月9日11時2分、103名が、この度の会場となる活水中高等学校の野外展示広場で、一瞬のうちににお亡くなりになりました。当時、爆心地から500mというこの学校は兵器工場として使われ、4階建てのモルタル校舎が建っていました。原爆の爆風を受けた校舎は半壊し、2011年5月まで学校校舎として使われていました。老朽化による耐震調査が行われ、現存のままでは崩壊の危険性を伴うとの決定により取り壊しをしました。取り壊された跡地からは資料にない握り地下防空壕が発見されました。また広場隅には校舎外壁が一部残っています。現在ではその地は芝生広場として生徒たちの憩いの場となっています。

今年是被爆70年を迎え、爆心地を中心として長崎市内の歴史、平和、文化を意味する場所で現代美術展を展開していくこの企画は、芸術活動が平和という意味の見える美術展となっています。平和と芸術が共存するときに展示場所の意味する現代性を考えることができます。現代美術は時間や場所、またその展示企画を含み、多くの方に「なぜ長崎に現代美術が必要で、またその役割がアートによる平和なのか」ということを語りかけるものとなります。

長崎の歴史を踏まえて、負の遺産として存在する被爆地をそのまま受け入れることが、若い世代にその意味を考えてもらい、また、伝えていくことが現代美術の原点にもどることになると思います。この野外展示場に多くの美術家の参加を希望します。



- ①薄井 崇友
- ②武内 カズノリ
- ③尾形 勝義
- ④松村 明
- ⑤富松 楓子
- ⑥西村 典子
- ⑦関 月子
- ⑧前田 信明
- ⑨釘宮 麻衣子
- ⑩金 庚樹
- ⑪山本 伸樹
- ⑫永田 典子
- ⑬吉田形 勸
- ⑭内藤 修子
- ⑮川田 剛
- ⑯国松 実
- ⑰新井 法子
- ⑱熊本信愛女学院高等学校美術部
- ⑳草野 十四朗



- ㉓ 三木祥子
- ㉔ 朴 然嫩
- ㉕ 池田陽一
- ㉖ 山口吟子
- ㉗ 坪田政雄

長崎大学 附属図書館ギャラリー

〈会期〉8月19日(水)～30日(日)
平日/8:30～17:00
土日/10:00～17:00
〈場所〉長崎大学附属図書館ギャラリー
〈ギャラリートーク〉8月19日(水)14:00～15:30



〈趣旨〉
本展はアート（表現）とその研究を追求してきたリングアートと長大の山口恭弘教授とのアートのコラボレーションとなります。
図書館ギャラリーの役割について改めて考えれば、かつてのお寺では、渡来人をもてなし、そこで交流を行った。これは学校の作りの原形になったのでしょう。また、ヨーロッパの教会は図書館的な役割を果たしてきた。それらの機能性や役割を繰り広げるため、まるでギャラリー空間そのものようにと進化展開して、そこには常にアート性が求められ、つまりアートははじめから重要な使命を担ってきました。
現在、私たちがこうして過去に遡り、そして同時に未来を見るときに、丁度鏡で映したような、その中間点にいると思う時、被爆70年の節目に当たると思います。また、長崎は海に恵まれて魚や食文化、渡来船が来て物々交換の場、そこから陸にのぼって江戸まで運びました。寺や教会、長崎の地の利を生かすことは、つまり海と陸の中間点となり、言い換えれば被爆70年という節目を、そこに重ね合わせ時、私たちのアートの活動は、更に意義深いものになり、未来につながっていくことでしょう。

ナガサキピースミュージアム

〈会期〉7月7日(火)～28日(火) 9:30～17:30
〈場所〉ナガサキピースミュージアム
〈ギャラリートーク〉7月12日(日) 10:30～11:30

〈趣旨〉
ナガサキピースミュージアムは、“長崎から世界へ発信する平和の玄関口”となることを目指して活動続けるミュージアムであります。決して大きいとは言えないその空間から、平和な時間が無限に広がっているかのように思えるこの場所は、私たちの企画する一連の本展覧会の中心となる会場であり、私たちがこの場所から現代アートを通して平和の表現を発信できることは願ってもない機会です。
また、RING ARTは毎年、8月9日になると長崎爆心地の“誓いの火”灯台（以下灯台台という）に立ち、世界中から集まった多くの皆さんとともに折り鶴を折って灯台台に貼り付けるというパフォーマンスを行ってきました。被爆70年のこの夏も、本展の関連イベントとして実施されます。
世界の平和を願って作られたピースミュージアムと灯台台。この2つの場所で、アート表現を通して様々な人々とふれあうことができるのは、まさに今、平和があるからです。
その思いを皆と共有しながら、未来の平和についても考える機会になればと願います。

ブリックホール会場出品者



木嶋 正吾



イケダ 一路志



馬場史子



宇野 和幸



宮部 真知子

「芸術≠漁具、平和≒日常」

“芸術は爆発だ！”とはかの岡本太郎が1981年にマクセルビデオカセットのCMで語ったひとこと。30年以上たった今でも時々芸術は？と考えた時にこの「爆発だ」というのが反射的に思い浮かぶほど私の中では心に強く残る一言です。芸術を語るのに決まり文句の様もありますが、岡本太郎自身の芸術に対する考え方はこうです。

「芸術は、ちょうど毎日の食べものと同じように、人間の生命にとって欠くことのできない、絶対的な必要物、むしろ生きることそのもの…。すべての人が現在、瞬間瞬間の生きがい、自信を持たなければいけない、その喜びが芸術であり、表現されたものが芸術作品なのです。」(岡本太郎著：『今日の芸術―時代を創造するものは誰か』)

“芸術は爆発だ！”。昭和の日本人に絶大なる芸術観を与えた岡本太郎。しかし彼の芸術観は前述の通り意外にも日常のなかの喜びとその表現との考え方に触れその深さを感じた。

この度、現代美術家井川惺亮氏のお誘いで、芸術とは無縁の水産学研究の末席を汚す武者の筆者が、何と性懲りもなく2度目となるアートでの共演を果たした。元来子ネコのように好奇心の強いことが災いしそのお誘いを二つ返事でお引受けしたものの、そもそも小中学校での図画工作は通知表の評定が万年「2」で、進路を心配した母が中学校の美術の先生に色目を使った程。それが功を奏したかどうか今となっては不明ながら、中学3年で晴れて美術が「3」となった日奇しくも我が家ではお赤飯を炊きお祝いをしたほどです。10代前後の私に取って、絵はむしろ「敵」で、関連する授業やイベント全てがまさに「戦い」でした。

この度の美術展のテーマは被爆70周年ということで「平和」。打合せの中で平和とは何？という問いに対し、例の「芸術は…」にあやかり、平和とは日常だ！」と私は告げました。筆者の出し物はかご漁具4部作。①古来の小型かご、②現在使用の比較的大きめのかご、③保管中に野良猫(大学内に生息)の反乱により破壊されたかご、④イカを増やすために筆者が考案し特許を取得したかご。日常を守らなかった人類はかごを大型化しついには侵入者に破壊されるがかごの持つ産卵床機能に気付き生き物のゆりかごとすると言うストーリーとした。日々の糧を得るための漁具から、家族を養い、他者を養う道具と進歩した結果、場所をめぐり、獲物をめぐり争ってきた。ヒトから人となり文明化された人間への進歩がもたらしたものは日常から脱却であった。

食糧を得ると言う動物としての人類根源的な道具でさえこのような経緯を辿ったことから、他の道具においてはましていわんや。しかし、かご漁具では、ない知恵を絞るかごの持つ本質的な機能から獲るだけではなく増やすことに転嫁することで他者との争いを軽減し、自然界の日常を考えた漁具へと本家帰りする取り組みもおこったのである。

そういえばこの度一緒に井川先生も現代アートは日常の中にあると仰っていた。漱石も草枕の中で「住みにくき世から、住みにくき煩い(≒戦争：筆者注)を引き抜いて、ありがたい世界をまのあたりに写すのが…、画(え)である…」と述べている。平和も芸術もつまるところ「日常」を感じ、それを楽しむことが大切であると言ったところであろうか。

山口 恭弘(長崎大学大学院教授 漁具漁法学)

長崎ブリックホール

〈会期〉7月19日(日)～25日(土) 10:00～20:00
〈場所〉長崎ブリックホール 2Fギャラリー
〈ギャラリートーク〉7月19日(日) 14:00～15:30

〈趣旨〉
長崎ブリックホールのギャラリーは、私たちRING ARTにとつて非常になじみのある展示空間です。
私たちは長崎ブリックホールが開館したときから毎年展覧会を開催してきました。同会場で様々な国の作家達が集う「春風ながさきより」(RING ART企画)やアートを通して平和を希求する「8+9展」(RING ART企画)など、展覧会のコンセプトはその都度変化（深化）しながら、ギャラリートークを通して、回を重ねていくことによって作家同士のコミュニケーションが深まり、そしてより互いを認め合うことができました。こうして国境を越えた友情・強い絆が育まれる過程は、まさに平和が生まれる過程と同じだと言えるのではないのでしょうか。
被爆70年という節目の今年、ギャラリーには作家達の平和に対する思いがより一層強いものとなって空間に表れるに違いありません。そして、相変わらずここから明るく、更に発展的な美的表現と平和へのメッセージが広がっていくことでしょう。7月から8月にかけて市内6会場を舞台上に平和展を開催しますが、このブリックホール会場では、プレ平和展として福島作家などをお迎えし、平和展への序曲となります。

メッセージアート

「イノベーションとしての美術から」

美術の役割は、既成のものの方見方や考え方を揺さぶって、知覚認識のあらたな切り口を提示すること。イノベーションだ。現代美術の先駆者ポール・セザンヌは「自然を円筒体、球体、円錐体でとらえなさい」と述べた。四角い豆腐は三つのどれに該当？と、考える必要はない。円筒や球、円錐、どれも曲面状。豆腐の平らな面が、視野の焦点を中心にして同心円状に遠のく。平面がお椀を伏せたように曲面状に見える。目を移すたびに曲面が連続して連なる。世界は凸凹でまとまりがない。人がものを見る時の本質をえぐり出したのがセザンヌ。世界はマダラ模様の万華鏡ではないか。混沌とした万華鏡的世界を絵画にして秩序を与える。セザンヌはそれを「感覚の実現」と言った。見ることの新しい切り口から絵画をイノベーションしたのだ。原子核は戦争という切り口から原爆を生みだし、平和利用の切り口から原発をつくった。サーカスで曲芸していようが、野性だろうがライオンはライオンだ。娯楽を与えもすれば死に至らせることもある。原子核もライオンも本質は獐猛なのだ。憲法九条にさまざまな切り口からのアプローチが絶えない。集团的自衛権などはサブライズの切り口だ。憲法九条の不変の本質は、人々が憎悪と殺戮をやめて愛しあう道を探ること。混沌（憎悪と殺戮）の万華鏡的世界にどうやって秩序（愛と平和）をもたらすか。セザンヌの「感覚の実現」以上にむずかしい。「実現」に向けて世界中の人々と知恵を出しあいたい。

早見 堯(美術評論家)

新聞、テレビでは、「被爆70年」と話題に上がっている。しかし、私たち被爆者にとって、日々が「被爆日」である。原爆によって幸いにも生き残った人々は、その後ずっと命が尽きるまで放射線による心と体の後遺症に怯え、苦しんでいるのだから。どう考えても被爆したことが原因であろうと思われる病気であっても、国はそれを認めない。

私は、3歳10ヶ月、爆心地より約7キロの疎開先で、あの強烈な閃光を見ている。5日目、自宅のある西坂町へ歩いて帰宅。当時は誰も放射線の知識が無く、庭先に植えた野菜を食べ、爆心の浦上一帯で遊んで育つ。17歳頃から、少し大袈裟だが、体の悪くないところを挙げた方が早いのでは、というくらい、癌や内臓摘出など体調不良が続いている。自身でも、これらがすべて被爆したためとは思ってはいないが。

日本も県も市も対外向けには「唯一の被爆国、二度と繰り返してはならない」など、涙ながらに訴えているが、腹が立つというか、笑ってしまふ。その足元では、戦争、原爆を語り伝える貴重な遺構を次々取り壊し、被爆者や被爆体験者の声に耳を貸そうとはしない。1996年、「原爆落下中心碑」を撤去、その後に「人物像」を建てるという計画が出たとき、いち早く「果たして人物像は原爆中心碑にふさわしいのか」という声をあげた芸術家グループに呼応して、多くの市民による「長崎市民原爆中心碑問題を考える市民連絡会」が結成され、全国に呼びかけた「署名活動」、議会への「請願」、「座り込み」等々で戦い、いよいよとなれば、私を「三角柱」にチェーンで縛りつけ、「工事強行には実力阻止」と話を決めていたが、最終的には「三角柱」はそのまま現地に残し、「母子像」は別の場所に、というこで決着。その後も被爆遺構出土の度に、行政と戦わなければ保存出来ない。先の戦争のとき、何故止めなかったのかと親を責めたが、今日の社会状況を見ていると、今度は自分が責めを受ける者になったことを実感している。

他国の戦の為に人を殺し、殺される。そうなってはいけないし、そうなることを許してはいけない。「命は宝」なのだから。

竹下 美美

70年前、原爆に遭い、ある家族のほとんどは、その命を落とした。その場に居合わせなくて、生き残った4人の兄弟（昔は子供の数が多かった）の一人が、私の父である。

私の母は、原爆投下の際、たまたま建物の陰にいたので、原爆の閃光から通れ、生き延びることができたそうである。後年、大病を経験するが、原爆に遭ったことが、その原因ではないかと思いつけていた。

父方の祖父は、上記のように原爆で命を落としたが、母方の祖父はフィリピン沖で命を落とした。乗っていた輸送船が撃沈されたためだ。本来は骨壺が納められているはずの木箱が送られてきて、その中には祖父の名前が書かれた小さな札があり、「カラカラと乾いた音がしていた」という祖母の言葉を覚えている。

私の父も母も祖母も、原爆や戦争のことを積極的に話そうとはしなかった。表現をするための言葉があり、心情を隠すための言葉がある。そして、無言の向こうにきこえる強烈なメッセージも、またあるのだ。

そのメッセージは、ひとつひとつの命の尊さを訴えている。

命の数を天秤にかけて、原爆の正当性を主張する者もいるが、そのような「正義の着想」が平和の対極にあるのだらうと思う。

8月9日が近づくと、毎年「平和」をテーマとした多くの催しが行われる。ひとつひとつの積み重ねが大切であることを理解しつつも、私にはなぜか違和感がある。

被爆70周年の2015年、私は静かな秋に、「平和を願う」コンサートを行おうとしている。

小畑 郁男（作曲家 福岡女学院大学非常勤講師）

「RING ART P&L 2015『被爆70年を考える現代美術展』に寄せて」

「戦争の世紀から平和の世紀へ」。21世紀を迎えるにあたり聞かれたスローガンのひとつでした。ところが、2001年9月11日、アメリカ同時多発テロ事件が発生。ビン・ラディンを首謀とする「アル・カイダ」の仕業であるとして、世界は「対テロ戦争」へと突き進んでいきました。

あれから15年。アメリカが訓練し「対テロ戦争」を闘った勢力は「イスラム国」という名のテロ集団に生まれ変わり、各国の若者を巻き込んで世界中にテロを拡散しています。「正義の戦争」がもたらした最悪の結末と言わざるを得ません。戦争で平和は作れない、戦争で平和は守れない、アメリカ国民をはじめ世界中がそのことを思い知らされました。

今年は戦後70年、被爆70年の節目の年です。アメリカとキューバが歴史的和解を果たしました。クリミア半島やウクライナ、イスラエルとアラブ諸国など紛争の火種は絶えませんが、国家間の紛争を話し合いで解決し戦争にさせない確かな動きが、ASEAN諸国を起点に世界に広がりつつあります。日本国憲法9条の掲げた非軍事による平和構築の理想が世界中に共有される時代が訪れようとしているのは嬉しい限りです。

井川惺亮氏デザインによる「ナガサキ誓いの火」灯台台は、「ナガサキを最後の被爆地に」との願いを日本と世界に発信し続けてきました。先ごろ開催されたNTP再検討会議では、最終文書こそ採択できませんでしたが、核兵器廃絶への合意形成に大きな前進がありました。核兵器の全面禁止は非現実的だとされていた時代からすれば大きな変化であり、「ナガサキ誓いの火」の願いが、現実になる日が近づきつつあることを実感しています。

里 正善（長崎を最後の被爆地とする誓いの火灯台台建設委員会 代表）

平和を形ある作品にしようとするとき、人は委縮するに違いありません。かつて狂気の光が落下し、今なお進行形の課題を持つこの地で展示されるとなれば尚更のことでしょう。

現実と対峙するだけの私はいるのか。この厳しい自問は、狭義の自己からの脱却を促すことになります。

「私とは、私と私の環境のことである」このようにオルテガは明確な言葉を残しました。自己とは、外界を見つめる内なるものの波打ち際にしか成立し得ません。

自己が閉じた系であると主張する者には、10分間息を止めてみるように言うべきです。肉体は外界と循環し、同じく精神も外界と循環しています。循環していない血が腐敗するように、循環しない知もまた腐敗します。そして狭義の自己を表現するものが美術表現ならば、「オレが、オレがっ！」的世界観はいつまでも克服できないと思っています。つまり平和は遠い。

近代の歴史を振り返れば、芸術が人々を先導する力を持つことは言挙げするまでもありません。芸術家の感性は諸刃の剣です。

芸術を希求するものが美しさの呪縛を解かれ、広義の美に向かって久しい今日、ともすればコンセプトの研ぎ出しを凝視する瞳が、猥雑にして重くても愛おしい現実社会と自己に係る課題を刮目し、この美術展が結実したことに敬意を表します。

松尾 龍伸 （長崎インターネットラジオ ウェブマスター）

「現代美術とは多様な価値観を互いが認め合う、人間が人間らしくなる唯一の場所である。」

「現代美術」と聞くだけで、難解で知識がなくては追いつけない、実際の作品を見てもよく分からなければ解説を読んでも狐につままれたような気分にしかならない、想像ができないほど巨額である、といった印象をもつことが多々あるのではないだろうか。

今日の国際展、いわゆるトリエンナーレやビエンナーレに登場する作品は、愉しくて分かりやすい、観客参加型で気軽に触れ合うことができる、誰も笑顔に満ち溢れハッピーな気持ちになれるという、表層的で墮落した作品群が並ぶ。

現代美術とは、現代に生きる人間そのものを反映しているべきである。近代以前の美術の背後には、常に神や君主、権力が潜んでいた。そのため美術は「有り難い」ものであり、金銭ではかれないはずの価値はやがて権力によって金銭でしか測れなくなり、「高額化」した。

人間が人間を人間と思わず、虫けらのように殺すことを始めた第一次世界大戦下で発見された現代美術は、人間が人間として生きていくことを互いに認め、尊重し、共存する為に生まれた。即ち作品の背後にはどのような偉力も存在せず、居るのは人間のみである。そこに平和がある。

そのため従来らの価値観を覆すどころか、アーティストであること、作品であることという特権＝権威を放棄し、制作のテクニック、美術の現場でしか使用されない素材、作品のサイズなど既存の定義を次々と塗り替えていった。全く新しい世界を創造する努力が諍いを退ける。

つまり現代美術とは権力者が設定した「美術」という枠から逃れるために制作されているので、「美術」という概念を追求した結果、益々難解で頭でっかちになっていってしまったのだ。本来の現代美術はもっと柔軟で、人間の存在を示す原始的な発想に満ちている。

また、作品の背後には人間しかいないために、嬉しいことだけではなく悲しいこと、穢いこと、醜いことも現代美術では見せていかなければならない使命を帯びている。一人の人間が限りなく複雑なように、分かりやすい現代美術など存在しないのだ。複雑を認め合う必要性を忘れてはならない。

愉しくて、分かりやすく、高額であることが現代美術の条件であるというのは、高度資本主義に絡め取られている、墮落した現代美術の姿である。これら作品の背後には神の代わりに金が鎮座している。騙されてはならない。しかし現代美術は権威を破棄しているので、これらを退けない。

剥き出しの人間の現実を描く現代美術と向き合うのは疲れる。見ている自分が試されていることになるからだ。しかしこの厳しさを乗り越えなければ、我々は人間として生まれ、自己の鍛錬に人生を賭け、他者を尊重して生活するということはできないのではないだろうか。

しかしそれは、思うより簡単なことである。誰もが背負う思い込みや道徳、差別といった規定を外して向き合えばよいのだ。我々は、時には一人で生きなければならない時がある。すれば、我々がいま、ここに生きる意義が浮かび上がってくるだろう。

宮田 徹也 （日本近代美術思想史研究）

RING ARTメンバーから

「被爆70年を考える」

今夏も8月9日、知的障害の中高生らが爆心地の「誓いの火灯台」での「折り鶴パフォーマンス」に舞った。彼らに「70年を形にすると、私は70歳、その年齢の積み重ねで、つまり足の先から頭のてっぺんまでです。そのくらい平和を願っている姿です」と語った。高卒したばかりのダウン症の友人が、「職場（苺採集ざる洗い）からやっと溜めたお金です」と本展の参加費を届けてきた。彼の絵は、私から見れば俗っぽいピンクの絵の具を良く選ぶが、画用紙に着けると発光体のように輝き、それが実に優しさと平和な心を奏でる。

本展の募集は、締め切っても参加者が少ない状況であったが、地元よりも県外者の参加が多く反応したことがかえって心強く、また東京辺りから下見に来た作家らの姿に、「これこそ私たちが本格的な美術を長崎で実践しているんだ」という気概や自負を得た。またフェイスブックのお蔭で参加者が集まってきたとのことで、長崎にいと時代と共に深化する平和のありようも変化を感じるし、被爆を風化させないぞとも思う。

何よりも地元作家が幾分でも集まってきてくれたことや、また歴史を遡るようにかつての出島時代を想起させるかのようにポルトガルの、長崎市姉妹都市ポルト市にある長崎大学協定校ポルト大学のフランシスコ・ランジョ教授が、はるばると来崎し出品してくれことも、70年を考えることの希望と平和の明るさを感じさせてくれたことだ。それでアートを通して30年も平和活動をしてきた甲斐があった。さらに韓国の昌原大学校一行WooRiが、被爆70年の節目に長崎の“平和の泉を訪ねて”をテーマに、12月、県美術館や長崎大学で美術と音楽の発表をすることになった。そのオープン式席上で本展の報告書（パンフレット）が披露されることになり、誠に「平和の泉」のようにタイムリーで有難く、日韓で平和を共有する瞬間となりそうだ。

「平和は手にとることができない」と私は表現に悩んでいたが、被爆70年を経験したことで得た最大のもの、何度も着彩してきた折り鶴から、「そうだ、平和（折り鶴）は手に乗るんだ！」それを体感した。そして「誓いの火灯台」に飾られた折り鶴群に被曝福島の子どもも参加してくれ、それらが時折の台風の大雨に煽られ落下しても、その光景は目の覚めるような色彩群の輝きとなり、「この美しさこそは、未来の平和を照らした表現だ」と感動した。

井川 惺亮 （長崎大学名誉教授・客員教授）

「アートと平和、一人ひとりの思いが結集した展覧会」

展覧会、ワークショップ、パフォーマンス、メッセージアート、公開講座など、ひと月以上をかけて展開したこの「被爆70年を考える現代美術展」の企画を実現は、この企画の趣旨に賛同し、支援していただいた方々、一人ひとり思いが結集したものだ。

「平和展」は、ややもすれば絵に描いた餅になりかねない。私たちが目指そうとするこの企画を、一人でも多くの方に理解していただくため、丁寧に文章化し、まとめあげた企画書を作成し、多くの人に投げかけて参加を募った。

この企画を立ち上げまもなく、長崎市が募集した「被爆70年文化事業助成」に応募したが、企画内容の実現性（特に会場）を追求され、残念ながら採択にいたらなかった苦い思いもあった。しかし、この「被爆70年」の展覧会を実現しなければならない、という確固とした思いが運営委員メンバーを駆り立てた。この思いを裏付けするのは、これまで30年以上に及ぶ長崎大学井川研究室時代から続いている取り組みの実績であり、その発展と継続

を願う気持ちが現在の「RING ART」の活動へと受け継がれている。

準備段階の会場探しや呼びかけに対する反応の乏しさなど、困難な状況にあっても、周囲から勇気と希望の光を与えてもらった。「8月にはぜひ長崎を訪れたい」「8月9日には灯台火での折り鶴パフォーマンスに参加したい」。そんな反応が少しずつ増えていった。長崎歴史文化博物館、活水高校からは会場を提供していただき、企画の実現に向けて弾みがついた。さらに、十八銀行社会開発振興基金から、社会に貢献する市民活動として助成を認めてもらったことは大変有難かった。最も感激したのは、関東からはるばる会場の下見にやってきた作家の真摯な姿である。

最終的には、120名を超える県内、県外、そして国内外からの作品参加となった。作品参加した人以外にも、この展覧会を通じて様々な形でかわっていただいた方、そして支援や応援をしてくださった多くの方のよって実現できた「平和展」となった。それが、私たちが望んでいた「被爆70年」の企画で表現したい「平和」の姿だった。

「平和」に特権はない。誰もがそれを望み、それを自由に訴え、考えを実行することができる。それを誰でもが参加し、表現できる場として、設けることができた意義は大きかった。最後に、この展覧会を通じて平和な気持ちと希望を与えてくれた子どもたちに感謝したい。ワークショップやパフォーマンスに参加し、折り鶴を折って色を着ける姿、爆心地で合唱する子どもたちの歌声、その輝いた瞳や笑顔に、それに代える平和の姿はないとさえ感じた。そして、当たり前のようにだが、誰もが自分の平和を自覚し、その大切さを子どもたちに受け継いでいくことが最も大切なことだということが分かった。

考えてみると、私たちが目指そうとしている「アート」と「平和」はほとんど同じ意味であった。

野坂 知布 （RING ART代表／長崎大学教育学部附属特別支援学校教諭）

8月9日の原爆の日、長崎市の小中学校は登校日である。被爆した校舎を持つ小学校に通っていた私は、毎年8月9日になると、学校へ行き、祈念式典で「青い空は」を歌い、黙とうを捧げた。水を求めて彷徨った人がいただろう道を、炎天下の中、当時の苦しみを想像しながら歩いて帰った。幼いなりに、平和の大切さや戦争の苦しみを理解していたと思う。

私は現在、アートを自己の表現の媒体としているが、きっとこの「平和」を学んだことが、無意識にせよ作品の中にあるように感じる。「戦争の苦しみ」や「平和の大切さ」を直接に訴える作品ではないが、作品を見た人が、喜びも悲しみも包み込んで穏やかな気持ちになるように願いながら作品を作っている。

今回被爆70周年祈念として、全国から多くの参加者の方が長崎に来ていただき、アートを通して「平和」について考え、それぞれの方法で表現された。被爆70年という節目を迎えた今、長崎で展覧会をする意味は大きかった。中に入らないとわからないこともあるし、外から見ないとわからないこともあるだろう。私は常に長崎市という被爆地の中にいるので、今回外からの視点を持たれた方とお話をさせていただく機会を得て、いつもに増して「平和」について考えることが多かった。

そして、多くの人と語り合えることこそ、まさに「平和」だと思う。このような機会を作っていただいた皆様に感謝をし、今後もアートとともに平和に思いを馳せながら暮らしていこうと思う。これからも、世界の各地が大きな笑顔であふれ、自由に表現できる日常が当たり前になることを願ってやまない。

廣岩 裕香 （中学校教諭）

「被爆を考える現代美術展を終えて」

私にとって老いは、混乱と錯乱と言う媚薬に導かれた動揺に至り、忘却の処方箋を出し始めた。つまり記憶の動乱が取り散らかり、偽装の余地などない現実の登場を迎えている。その様な者が、文章を書くとは、恥の上塗りでしかなく戸惑うばかり、恐縮の一言でしかない。その中、拙い記憶を辿りこの展を振り返ってみた。

今期活動は、被爆と戦後70年の節目の年となった。それは、2015年の桜の便りを感じた頃から始まり、秋桜の返信が届く頃に活動が終わった。これほど、企画密度の濃い展覧会が、地方の一団体の手で実現出来た事、それに参加させて頂けた事、すべてが驚きと喜びの連続でしかなかった。それは、通常の展覧会企画であれば、従来想定されないはずの作品数、及び展示会場に歴史博物館回廊空間での展示があった事だ。3月から始めた博物館での折り鶴パフォーマンスは、8月に博物館エントランスを、夏のクリスマスツリーと化して、静寂の揺らぎを創り彩り終演した。また企画の柔軟さは、無謀かつ無限なる可能性に、公開講座に多彩なゲストを迎えた事にもある。多岐に渡る講師陣の公開講座は、埋没する心の震えを感動に変え、優しさの持つ共存が、共有である事を知り、学び空間の出現となった。そこに広がる庭は、芸術性の持つ思想哲学や創作表現は言うに及ばず、純粋性と探求心を知る、貴重な時間と繋がり、言葉の装飾を忘却させる力となって投下されたに違いない。

近年平和は、物事の善悪を語る紙面ばかりが、選考し先行する。しかしこの活動は、常に隣人と遊び・学び・驚き・笑い・泣き・感動し・怒り・論じ・戸惑い・考え、多くの矛盾を理解する事の重要性に目を向ける。それは、共に笑顔を、描き・紡ぎ・綴り、重ねる、軌跡の一遍にすぎない責務とも思える。

最後に、領域を超え、多岐に渡るご尽力、ご支援頂いた、関係各位の皆様を支えがあり成し得たものと痛感し、お会い出来た事への喜びと感謝を、拙き文面で届ける事がと願うばかりであります。（熟慮至らぬ所は、忘却老人の、混乱と錯乱の楽しい記憶と笑って頂きたい。）

佐藤 千代子 （栄養士）

他県に住んでいた私にとって長崎が発する平和は独特で今までに感じた事の無いものであった。現在進行形で続いている平和への想いや原爆の苦しみを感じる機会が多かったからだ。だからアートに携わるものとして平和とどう向き合うか毎回悩んでいた。今回の展覧会では多くの県外の方や海外の方が長崎に集まりそれぞれが長崎で感じた平和と向き合った作品と出合った気がした。長崎に滞在される作家の方やパフォーマンスされる方など拝見し、作品をつくっていく姿、過程をダイレクトに見れたのは貴重だった。また、ランジョ先生も何度も長崎に訪れその度長崎の地に想いを馳せた新作を制作されていて感動した。

RING ARTは本来学芸員が果たすべき役割も担って企画し実践している。私のような若い作り手は本当に学ぶことが多く、作家として自己表現のみならず地域や社会とどう関わっていくのかを考えさせられた。これからも悩みながらも平和と向き合い、作り手として社会と結びついていきたい。

中田 寛昭 （会社員）

祖父は陸軍兵としてビルマ戦線に赴き、戦後、帰国した。「長崎は新型爆弾でダメらしい。」という噂を聞き、絶望を抱いてたどり着いた長崎には電車が走っていたらしい。お金など持ち合わせていなかったが、車掌さんは「お勤めご苦労様でした。」と、無賃で祖父を乗せて走り出したそうだ。下車後に我が家を見つけた時、祖父は涙が止まらなかったという。

被爆70年を考えるにあたり、そんな祖父の話を思い出していると、知人より偶然にも祖父が映っている、戦後間もない頃の映像を受け取った。映像の中には人間のみなぎるエネルギーと喜びが満ちている。人々が手を取り、復興という大きな目標を掲げ、できる努力を尽くした結果が印されていた。人々の笑顔を生み出した背景には数え切れないほどの人と人とのつながりと協力が容易に想像できる。

RING ARTの活動も毎回それぞれができる事を持ち寄って成立している。私には、ほんの僅かなことしかできないが、そうやって、一步一步それぞれの思いを胸に同じ道を切り開いていく事が、互いを理解し、平和的な感性の創造につながっていくのではないかと思う。そのような機会に恵まれた事、その実現に尽力下さった全ての方々に感謝し、RING ARTと触れ合った多くの人たちとの輪が、次々と花が咲くように繋がっていく事を期待します。

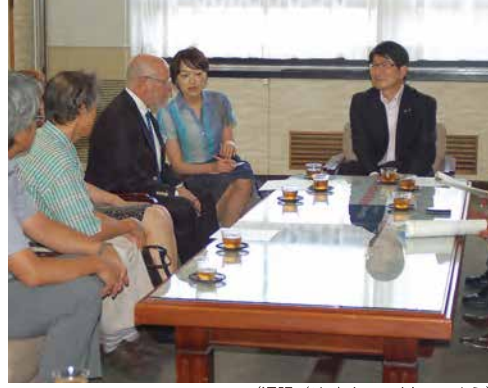
岩永 晃典 （会社員）

トピックス - フランシスコ・ランジョ教授 ポルトガルより来日 -



〈長崎市長表敬訪問〉8月10日

長崎市と姉妹都市のポルトガルのポルト市長、ルイ・モレイラ氏は今夏平和式典への参加を予定していましたが、都合で来崎できず、ポルト大学ランジョ教授に親書を預け、田上富久長崎市長にお届けしました。アートの平和活動がこのような形で両都市の文化交流にお役に立てたことはRING ARTとしてもやりがいを感じました。



(通訳/リペイロ・イカワ・ルミ)



〈長崎大学学長表敬訪問〉8月8日

ランジョ教授は今回の学長訪問は2度目となります。被爆70年の思いをアートに込めた彼は、その作品研究の成果を片峰学長に報告し、今後の更なる芸術及び学術交流を確認され、また友情を深めました。

2015年度前期

長崎大学公開講座 被爆70年を考える現代美術

時間/14:00~15:30 場所/長崎大学 産学官連携戦略本部 人材育成部門 生涯教育室(長崎市文教町1-14)

一般市民の皆さんが「被爆70年を考えてみましょう!」というテーマです。一つの方法としてアート(美術)を通して平和に貢献できる表現を提案するのが、この講座の試みです。ちょっとした何気ないもの(こと)、捨ててしまうもの(こと)でも、何かの役に立ち、しかも、それがとても大切でかけがえのない何かに気付けば、人が生きる喜びにつながることで美しく輝き、そこに平和の証しを見出すことでしょう!

7月11日[土]

「障がい者のアート性について」①

講師/野坂 知布(長崎大学教育学部附属特別支援学校教諭)
コーディネーター/新田 照夫(長崎大学准教授)

7月20日[月祝]

「アートによる福島復興の現代美術の役割とその現状」②

講師/山本 伸樹(美術家・元東京藝術大学講師)
司会/波多野 慎二(活水高等学校教諭)

7月26日[日]

「平和とアートとのあいだ」③

講師/井川 惺亮(長崎大学名誉教授)・高橋 真司(長崎大学客員教授)

8月8日[土]

「長崎港と歴史的につながりのあるポルト港風景を語る」④

講師/フランシスコ・ランジョ(ポルト大学芸術学部教授)
通訳/リペイロ・イカワ・ルミ

8月10日[月]

「アート(現代美術)の使命の意味するもの」⑤

講師/宮田 徹也(日本近代美術思想史研究)



チラシ・ポスター



現代美術展チラシ(表面)



現代美術展チラシ(中面)



公開講座ポスター



おりづるワークショップチラシ

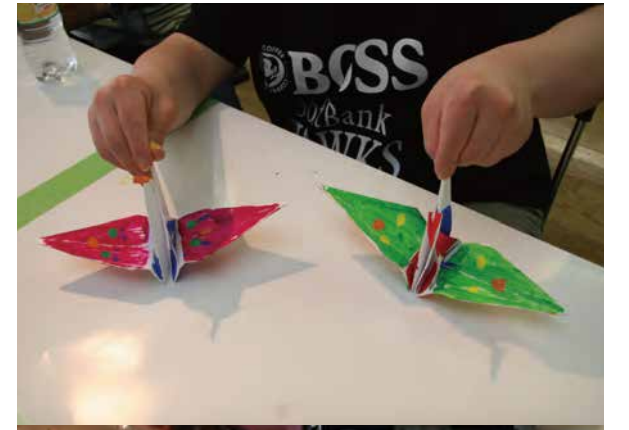
おりづるワークショップ in れきぶん

「被爆70年を考える現代美術展 RING ART P&L 2015」のプレアートイベントとして開催。参加者と平和を祈りながらオリジナルの折り鶴を制作・鑑賞する中で、親子や参加者同士のコミュニケーションから、今ある平和の大切さを学び・感じてもらうことを目的とした一般参加型のワークショップです。多くの子どもや大人、また博物館の寸劇ボランティアの皆さんまでもが毎回のように参加してくれ、まるで江戸時代からタイムスリップして来たかのような様子でした。

〈ワークショップ概要〉

場所:長崎歴史文化博物館 1Fエントランスホール

日程:3月29日(日) 10:00~11:30
4月11日(土) 14:00~15:30
5月9日(土) 10:00~11:30
6月7日(日) 10:00~11:30
7月12日(日) 14:00~15:30
8月2日(日) 10:00~11:30
8月8日(土) 10:00~11:30



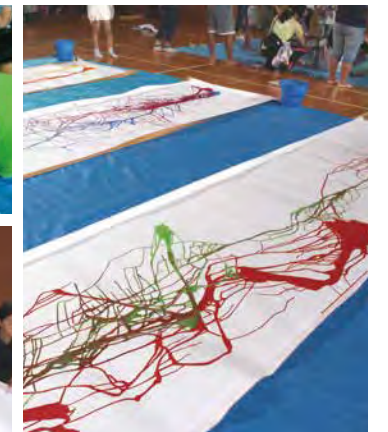
いわき市 田人「ART MEETING 2015 田人の森にあそぶ」ワークショップ

「流し絵で楽しもう!そして折り鶴に着彩しよう!-被爆70年祈念-」

昨夏よりアートを通して福島と長崎を結ぶこととなりました。その役割が「折り鶴」制作でした。アートによる福島復興のいわき市田人「ART MEETING 2015 田人の森にあそぶ」の企画により、昨年に続いて福島の子もさん(田人周辺の小学生)らにも「折り鶴ワークショップ」で画用紙に折り込んだ折り鶴に着彩してもらい、それらを長崎に持ち帰り、被爆の日、「誓いの灯」灯台に飾りました。RING ARTでは、アートが平和を運び、それをもたらす力を折り鶴着彩の中に感じました。

8月2日[日] 9:30~11:30

場所/第二田人小学校体育館(福島県いわき市) 講師/井川惺亮(長崎大学名誉教授)



2015年夏、長崎に滞在し、リングアートに参加して感じたこと

今日、美術は無力であると言われていた。当然のことだ。美術は市場経済にのる贅沢品としての商品でもないし、人間の欲望を誘発する広告でもない。美術は人間がどれ程孤独でも、ちっぽけな存在でも、「いま、ここに生きていいい」ことを証明する手立てであり、それは誰もが生まれつき持ち得る能力であり、空気のように眼に見えなくとも生命の活動を支える必要最低条件なのである。

我々は朝起きて服を着替えて、髪を整えて、自らの使命を果たすために各々の方向へ移動する。そこには美術の力が働いている。天気や季節感を元に今日着る服のデザインや肌触りを考え、世間で自己主張するために髪型を決め、眼鏡や靴、アクセサリ、靴や自動車などの服飾を整える。色や形、素材や用途といったき細かい内容を無意識に峻別しているのだ。そこには自由が深く介在している。誰もが同じ服装で、髪型で、思想で行動する時、美術は剥奪される。そのような日々が近づいている。軍服を身に纏う戦争である。

長崎は、安土桃山時代にポルトガルというヨーロッパとの外交を果たし、江戸時代には外交に準じてキリスト教の伝来とその迫害があり、幕末には長崎奉行の方向性によって戊辰戦争の戦火からは逃れたものの、1945年の原爆投下により壊滅した。敗戦後の著しい復興により今日に至る。このような長崎の受難の歴史は「近代の病」の縮図であるといえる。「近代の病」とはつまり、アメリカ独立宣言（1776年）、フランス人権宣言（1789年）、イギリス産業革命（1750～1850年代）という闘争を経て人類が獲得した「自由」が、流通拡張と人口増加を培養し、「平等」が「贅沢」を促す市場経済という欲望の競争の結果、発症した病である。

「被爆70年を考える現代美術展」である今回のリングアートは、爆心地公園を中心に、市内6箇所の会場で7月から8月という長い期間をかけ、講演、ワークショップも含めて多角的に行われた。8月の頭、佐世保を起点に県内に入った私は、九十九島、平戸を経て長崎市内入りを果たしたため、立ち会ったのは展覧会のほんの一部だったことは残念である。しかしあらゆる権威を破棄する現代美術とは「いま、ここ」であると同時に「いつか、どこか」に存在することを想起することでその時間と場所に到達することが可能なので、案ずる必要はあるまい。

私が訪れた会場は画廊や美術館ではない空間であり、各々の場所で作品が活き活きと展示されている姿に感動があった。ここで展覧されるためにどのような努力が為されたのかも重要な観点である。そしてその空間である公園、学校、博物館が公共施設であることにも注目しよう。開かれた展覧会にこそ、現代美術の核心が存在する。

ポルトガルのランジジョ教授との交流も勉強になった。私の最大の収穫は、平和とは戦争と戦争の間の休息ではなく、独立した存在として継続させなければならないというリングアートの意志であった。この思いを、多くの人々に伝える使命を育まなければならないまい。

宮田 徹也（日本近代美術思想史研究）

広報記録



長崎新聞・平成27年6月7日



NHK・平成27年7月7日



NIB「news every」・平成27年7月7日



日経新聞・平成27年6月25日



西日本新聞
平成27年6月26日



長崎新聞・平成27年7月8日



読売新聞・平成27年7月8日



長崎新聞・平成27年8月9日



長崎新聞・平成27年8月7日



朝日新聞・平成27年7月21日



愛媛新聞・平成27年8月10日



愛媛新聞・平成27年8月15日



公明新聞・平成27年8月7日



愛媛新聞・平成27年8月14日

〈編集後記〉

パンフレット作成が遅れたのは、スタッフが本事業の激忙で返上していた仕事に後日追われたこと、パンフレット作成資金難調達のことなどのためであった。編集レイアウトは本事業実施したメイン会場の長崎歴史文化博物館と活水中・高等学校から展開し、特に「被爆70年」節目を意識しながら編集に臨んだが、紙面の関係で多くの事項を割愛し、更に写真データや文字サイズも縮小し、またレイアウトの未記載者の、残りの賛助出品者が各ページに分散し、いろいろとご迷惑をおかけするなど誠に申し訳なく思う。なお遠路来崎され展示作業に携わった方にコメントを依頼した。

目に見えない形での特筆は、何よりも本事業に出品者から参加費の他に支援金が添えられていたこと、そして大航海時代を彷彿させるように遠くはるばると被爆のために来崎したポルトガル作家や、関東周辺から本格的に下見に来られた方々、ご賛同やまたご出品された作家やご支援して下さいた皆様方に、そして本事業のお力添えの長崎大学 片峰茂学長、並びに公開講座実施等で産学官連携戦略本部 人材育成部門 生涯教育室 新田照夫教授に感謝の意を表したい。

RING ARTの活動：「国際」「地域」「平和」をキーワードとして、年に二つの展覧会「春風ながさきより」、「平和展・8+9」を開催している。また、ワークショップは毎年小浜で実施し、NTTポケットギャラリーの個展をローテーションしながら活動している。